

わがまち歴史散歩

人力車がけん引した明治北摂の文明開化

人力車受容期の史料

明治改元からわずか数年後、東京や大阪といった大都市では人力車が走り始めました。人力車は東西南北、縦横に走りながら、実は、地域の姿を変えていったのです。走って、走って、走り回って、いわゆる文明開化のけん引役となっていたのです。これこそが、人力車を「文明開化」の象徴とする本当の理由というべきでしょう。もちろん、在郷町池田やその周辺でも、同じことでした。

現在の池田市域では、明治6（1873）年9月、豊島郡第二区長が、大阪府参事渡辺弘からの通達を受けて、麻田会議所の詰合中に人力車小旗を紛失したときの対処法を指示した文書が残っています。明治6年には池田市域でも人力車を営業する者がいたことが分かります（岸上家文書）。

次に、明治10（1877）年には、豊島郡第二区内で井口堂村の5人、石橋村の1人、東市場村の2人、野村の1人、中ノ島



呉服橋たもとに描かれた人力車
(歴史民俗資料館所蔵)

村の2人、今在家村の2人、それと現在は豊中市域ですが、南刀根山村の5人、北刀根山村の1人、柴原村の1人、少路村の1人の名前と、2人乗りか1人乗りかの区別、開業・止業の日付、譲り渡しと譲り受けの記録を書き上げたつづりが残されています（同上）。池田村など第一

区の記録がないのが残念ですが、人力車を営業する者が能勢街道や西国街道沿いの村々を中心にできていたことだけは確かです。一部は自家用だったとしても、まずは営業用と考えるべきでしょう。

人力車の普及を支えたもの

明治10年以後には、人力車の利用に関する記録もいろいろと見つかってきます。まず、特別な例かもしれませんが、

んが、水不足が続く中、明治10年7月26日、千里川の用水を巡って現在の豊中市に属する新免村と麻田村との間に流血の争いが生じました。そのとき麻田村の前戸長が刀根山村から人力車を雇って池田警察署に急

報しています（小田『明治の新聞にみる北摂の歴史』）。刀根山に人力車があったことは先ほど確認したばかりです。人力車は速く移動できる乗り物として急を知らせる、すなわち情報伝達手段の変革を担ったのです。

次に、物見遊山の様子と人力車の関係を見てみます。

『大阪日報』の記者が明治11年晩秋の一日箕面へ紅葉見物に行きました。彼は、開通して2年目を迎えた官有鉄道で梅田から茨木まで行き、茨木からは駅に待機する人力車を雇って箕面の料亭まで運んでもらいました。「車夫の利食は至る所に同じ、然れども、道狭くして悪しく、且つ不案内なるを以てやむを得ず車行す」と書いています。人力車夫は貪欲な者が多いとされていますが、人力車は旅を助けた乗り物であるとも述べています。この記者は、帰途は箕面から大阪までこれまた人力車を雇い、観楓の余韻を楽しんでいます。人力車は都会人に休日小

旅行の楽しみを与えました。

有馬温泉も事情は同じことでした。明治10年8月7日付の『大阪日報』記事には、大阪から九里（36キロメートル）にして人力車も通行すると書いています。相当な距離です。

明治20年ごろになると宝塚温泉も開け、ここでも人力車が活躍します。西宮から1人乗り15銭、神崎（現在のJR尼崎駅辺り）から同じく16銭の規定で、帳場もできました。

明治10年代後半になると、自由民権運動などで村と村、都市と村との弁士同士あるいは弁士と地方の活動家との交流が広がります。池田でも政治のあるべき姿を求める有力者の活動が新聞によく掲載されています。人力車は人と人、地域と地域を広く結びつけ、新しい人間関係を生み出して行ったのです。

人力車の史料を

人力車は当時の人々の暮らしと意識に大きな変化をもたらす手段となったのです。史料を調査し、このことを、もっと広く、もっと具体的に明らかにしていきたいものです。

（市史編纂委員会委員長・小田康徳）
問合せ 歴史民俗資料館

☎751・3019